

---

# いちご盜人（プロトタイプ）

斎河 燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
いちご盜人プロトタイプ

【NZコード】  
N4338N

【作者名】

斎河 燐

【あらすじ】

バンドのおっかけが趣味、の女子高生・芹生<sup>せりな</sup>。親父の借金のせいで天敵だと思っていたライブハウスの警備員・肖衛<sup>しょうえい</sup>と結婚する羽目に。だけどソイツには秘密があつて。腹を壊して泣きつ面に蜂、「冗談キツいよ」\*別BOOKにて、連載版「いちご十盗人」始めました。（サイトからの移設改稿版）

いちご大福に当たつた。

とはいえて誤解しないで頂きたいのは、当たつたといつても『ひとつ余分にもうたでラッキー』、という意味では決してない、ということなのだ。

もちろん引換券が付いていたわけでもないし、おみくじのよじに大吉と刻印が押されていたわけでもない。

下したのだ。腹を。豪快に。

なんとなく舌がピリピリしたし、いちごが妙に柔らかかったから嫌な予感はしていた。廃棄寸前の五十円引き商品ゆえに、仕方ないと言えば仕方ないのだけれど。

しかしいくら割引価格と言つても食べずに棄てるのはかえつて損。食欲と言つより小銭に勝てなかつたアタシはどれだけ小市民だろう。

う。

滲む脂汗を真新しいパジャマの袖口で拭いつつ、ビオフェルミンの箱を戸棚から引っ張り出す。

正露丸を買っておけばよかつた。後悔しても時は進むばかりで戻つてはくれない。

成り行きとは言え新婚なんだし、あの強烈な臭いの錠剤を置いておくのもねー、などと格好ばかり気にしている場合じゃあなかつた。第一、糖衣Aなるものもあつたはず。あれなら大して臭わないとみた。

何故見落とした、阿呆め、アタシの阿呆め。

ダイヤルを『浄水』に合わせて蛇口を開く。

「ツップを構えたアタシを嘲笑うかのように『フィルター洗浄中です、しばらくお待ちください』という爽やかなお姉さんの音声が響いた。

(勘弁して)

ビオフェルミンを握り締めた手で腹を押されてうずくまる。

広々とした新品のシステムキッチンは濃いブラウンの統一配色で暖かい印象なのに、ピカピカのフローリングは氷のように冷たい。なんとかマットの上に体を横たえると、ふっと意識にもやがかかるつた。

「芹生<sup>せりな</sup>?」

男の声が聞こえる。低すぎない、軽くガーゼで包んだみたいな、芯のない声が。

ああ、アイツだ。直感的にそう思った。

「どうしたの」

坂口肖衛<sup>さかぐちしょうえい</sup>、まだまともな会話をらしたことのない、アタシの夫。もつさりした時代遅れのヘアスタイルとダサい形の黒ぶち眼鏡が特徴の三十八歳。

来るな、寄るな、触るな。言いたいのに声が出ない。

アタシは「イツが嫌いだ。  
大嫌いなのだ。

＊＊＊

最寄駅まで徒歩五分、庭付き犬付き外車付きの三階建て。  
外壁は防火だか防寒だか防汚だかの効果があるスベスベ大理石で、

日がな太陽光を反射している傍迷惑な一軒家。

「」が昨日からアタシの 坂口芹生十八歳の、住家。

近所にちょっと古風な商店街があるせいか、耳を澄ませば絶えず人のざわめきが聞こえてくる、静かとは言えないけれど住みにくくこともない立地だ。

引越し前、一人暮らしをしていた部屋は線路の真裏で、耳に入るのはもっと刺さるように冷たい音ばかりだったから、こういうのなら構わないと思う。

あいさつが普通に交わせる街。昭和の雰囲気を残した、優しい街。いいところなのだ。この状況でなければ。

前述で察して頂けたかもしれないけれど、アタシは高校卒業とともに好きでもない男のもとに嫁いだ。お見合い結婚だった。

それこそ時代錯誤な話なのだけど、発端は親父の借金。

言つてみればアタシは借金のかたに売られた可哀想な女の子なのだ。

とはいえる父ひとりを責めるつもりはない。家族のためだということは重々承知しているから。

海外の投資会社がどうにかなったところで下町の小さな工場に影響が及ぶなんて始めは思いもしなかつたけれど。

しかしリーマンショック以前も以降も、打撃を受けたのはことごとく中小企業だったようだ。親父の板金工場も例に漏れず、あつという間に傾いた。ピサの斜塔も真っ青の傾斜角だった。

で、つかえ棒になるものはないかと探つた結果、候補にあがつたのがアタシってわけだ。

ロリコン趣味の変態つてのはいつの時代にもいるもので、我が家は借金を返済してもらうために十八歳のピチピチ乙女（ちなみに未

体験）を餌にすることにした。

母は泣いていた。号泣だつた。一緒になつて弟も泣いていた。でもアタシは構わなかつた。

家族のためになるのなら、金持ちジジイのもとで悠々自適に暮らすのもいいかなつて。

しかし見合いの席で待つていたのはアタシの天敵とも呼べる男だつたのだ。

「シヴィールの警備員！」

和食屋の襖を開けるなり叫んでしまつた。

ちなみにシヴィールといふのはちよつと前までインディーズだった5人組ロックバンドのこと。

ビジュアルはややゴシック系で、音楽性は少しB-2に似ていた。つまりもの凄く上手かつたのだ。

メジャー・デビューをしてからはすっかりライブに行けなくなつたけれど（値段は上がつたし人気がありすぎて席は取れないし）、アタシはヴォーカルのナツの大ファンだつた。

金髪でちょっと冷たい眼差しの、細身の美形。そしてとにかく歌声がセクシーな彼。

地元のライブハウスでは出待ちなんて当たり前にしたし、楽屋に押しかけようとしたこともある。

その度にアタシの行く手を阻んでくれた憎きガードマン。

それが坂口肖衛三十八歳、見合い相手のロリ「ンジジイだつたのだ。

「そここの女子高生、ルールが守れないなら来るな！」

なんて毎回怒鳴ってくれちゃつて、苛つくつたらありやしない。

こんな皮肉、あつて良いものか。たかが警備員に財産なんてある

わけないし。

しかし奴は現金一括で親父の借金一千万を返済してくれ  
在に至る。 現

誰か冗談だつて言つてアタシの類を叩いて。でもつて悪夢から目  
を覚ませてやつて、お願ひ。

\*\*\*

「ん……」

眩しい。

気付くとアタシは広々としたキングサイズのベッドの中央で横に  
なつていた。

真っ白でフカフカの羽毛布団はベッドと同じ幅があり、一枚な  
に充分暖かい。

かなりの高級品に違いない。お値打ち品ではいられないから。  
広い天井。どこ、ここ……あ、坂口の家だ、アイツの寝室だ。  
大きな格子窓から光が差し込む明るい空間は、恐らく二十畳ほど  
の広さがある。

壁紙の淡いグリーンにナチュラルウッドの家具が並ぶ様は一見森  
林のようだった。

(アタシ、どうしてここにいるんだっけ)

セミロングの黒髪を手櫛で整えながら体を起こすと窓際のソファ  
で眠るその人の姿が目に入った。

「 肖衛……？」

思わず眩いた名前に反応し、ピクリとその肩が動く。

シャツの上からでもわかる、筋肉質な胸元はさすが警備員とでも

いうべきだらうか。かといって決してガタイがいいわけじゃなくて、案外細身な体つきが案外セクシーでムカつく。

でも、真ん中分けてボサボサの長い髪は嫌いだ。縁の太い眼鏡も。さらに口煩くて口リコンなわけだから全体で見れば最低だ。けれども。

「もしかして、運んでくれた……とか？」

「……、一応」

独り言のつもりだったのに返事が聞こえて思わず飛び退いた。細目でアタシのビビりぶりを確認し、肖衛はふふっと意地悪そうに吹き出す。

「大事な奥さん『いち』大福にやられて苦しんでるの、ほうっておけないからね」

「し、知つてたの」

「うん、まあ、だつて包装紙が捨ててあつたし、芹生、俺の料理手つけずだつたから」

だつてそれは。

「一服盛られると思つた？」

「えつ」

お見通しか。

や、もちろんそれだけじゃないけどさ。なんとなく、これ以上アソタのマネーにたかりたくなかつたつていうか。ちなみにいちご大福はアタシの自腹だ。

「馬鹿だね、そんなことしないよ。小細工なんてしなくとも、君は

もつ俺に逆らえないんだから」

得意顔で立ち上がる彼を見て、アタシは再びとび上がる。ヤバい。ここ寝室、アイツ男、そしてアタシ達夫婦。

「……おあづけは一晩だけにしてもらえると有難いな」「

そう言つて、アタシを押し倒す強い力。流石に警備員、逆らつことは許されなかつた。

外されて行くボタン。はだけた肩口に這いつゝ。熱い息が胸元にふきかかる。

「やつ、……つ」

「昨日は家中うまく逃げ回つてくれたよね。そんなんに俺が嫌い?」

当然だ。

親父の借金を返済してくれたことに関しては有難いと思つてる。でも、アタシは元々コイツが大嫌いだったのだ。

万が一その前提を取り消せたとしたつて、この男はダサすぎる。近寄ればダサさが感染しそうなくらい。

最先端を田指せとまでは言わないけれど、物事には限度つてものがある。

まともに顔が見えないような髪型とダサ眼鏡につける好感度があるというのなら、その在処を教えて頂きたい。

「……うんつ……待つ……！」

涙目で首をふる。やだ、怖い。やだよ。

「……もう充分だよ、待つのは

「や、やだあ……っ」

後ずさりにも後がない。

やだ、そんなとこ触らなこでよお……っ！

しかしベッドの縁でアタシを抱き寄せた卍衛は、容赦なんてしてくれなかつた。

「……や、つあ

「芹生、せり、俺はずつと」

「いた、いたこ……ー。」

耐えかねて両手を振り回す。蹴り飛ばしてしまいたかつた。  
ちょっと良い奴かも、なんて思つて損した。最悪だ。最低だ、こ  
んな初めて。

なんでこんなことになつたの。

「こやあーっ！」

力任せに平手打ちをくらわせる。

趣味の悪い黒ぶち眼鏡がふきとんで、そして、同時にモサッとしたものがアタシの顔のすぐ横に落ちた。カツラだ。  
え。

思わずピタリと動きを止め、彼の顔をまじまじ見つめる。

「しょ……いっ！」

嘘。

真つ直ぐ通つた鼻筋と少し冷たそうな目許、金の髪。  
細い輪郭に並ぶ、見事なまでの麗々しいパート。

どこかで観た、ううん、アタシがずっと遠くから見続けていた人の顔が、そこにあった。

「……な、な、ナツ

！？」

うそだ。

肖衛がナツ？ ナツが肖衛？

意味不明だ。訳が分からぬ。しかし確實なことがふたつある。アタシは今憧れのナツと繋がっちゃってるってこと、この人と結婚しちゃつたってこと。

「う、うそ、あ、あんた」

「バレちゃったか。うん、俺はナツです」

肖衛はアタシを組み伏せたまま、説明は終わってからでいいかな、と余裕のない表情で笑った。

「冗談キツいよ。

\*\*\*

皮膚を一枚余分に被っているみたい。ベッドの中で寝返りをつつても、全身の感覚が薄くしか感じられない。

ぼうっとした頭で隣に寝そべる男を眺める。

少し短めの金髪と細身の身体、影のある面差し。どこからどう見てもシヴィールのボーカル・ナツだ。

眼科に行くべきだろうか。視界が不明瞭なのかもしれない。

いや、でも…………夢でもカンチガイでもかまわない。アタシの初めてはナツに捧げた、と思っていた。

「うそ、騙すつもりはなかつたんだけどね、うそ」

相づちマイセルフでナツは後ろ頭をかいた。棘の形のシルバーピアスが星のようにキラリ光る。

「「めんね、痛かった、よね？　だつてずっと欲しかつたものが目の前にあつたらさ、普通、耐えきれないじゃない」「

「ちやつかり同意を求めないでくれる」

「はは。」「めん、まさか初めてだなんて思わなくて」

「もうその件はいいよ」

良くないけどいい。だつてもつと重要なことが　　説明しなければならないことだ　　他にあるでしょ。

「なんで肖衛がナツなの。でもつてアタシと結婚なんてしたわけ」

ナツは、いや肖衛は、ええと、もひどいでもいいや、とにかく彼はちょっと困つたような顔をして答えた。

「最初は単なる変装だつたんだよね。ライブハウスから出る時の時の日、君に会つて……チヨコを貰つたんだよ」

「は？　アタシ？　なんで」

「覚えてないの？」

うんうんと頷くアタシに、肖衛は残酷だねえとつぶやきを漏らす。

「おとこのバレンタインデー。俺を本物の警備員だと想つたのか、警備お疲れさま、つてちやこチヨコをね」

「やうだつたつナ……」「……」

記憶はない。頭を捻るアタシを見下ろす彼の上半身は未だ裸だ。それを言つたらこつちは全裸だけれど。

どうやって受け止めたらいいのか分からぬ。

大嫌いなアイツに騙されたとるべきなのか、大好きなあの人と『美女と野獣』的シチュエーションを迎えたとるべきなのか。

「俺にとつては特別な出来事だつたよ。警備員まで気遣うファンを目についたの、初めてだつたし。それ以来忘れられなくて、舞台の上からもずっと君だけを見てたんだから」

へ。

ナツが、舞台の上からあたしを？  
ポカーンと開いた唇をついばんで、彼は笑う。

「あとはもう、警備員のフリを続行して君に近付こうとしたんだ。  
ぎゅうぎゅう押されて、どさくさ紛れに抱き締めてみたりとか」

「……そのわりにえらく怒鳴られた覚えがあるんだけど」

「だつてセリ、怒った顔も可愛いから、つい」

「な、なにそれ、趣味ワルすぎ」

言い返しながら少し疑問に思った。

あれ、もしかして今アタシ、告白サレマシタカ？

ナツで肖衛で夫でもある彼に 今更。

だけど何だらう、悪い気はしない。嫌いと好きが半分半分、ごちやませになつてゐるせいかもしれない。

どちらを優先させたらいいのかは、まだ見当もつかないけれど。

少し照れ臭くなつてきたアタシを抱き寄せながら、彼はふと意味深に目を細める。

「悪いのは趣味じゃなくて根性かもね。結局お金で買ったわけだから

「ら

「んつ…… ゆよつ、………… 重、いってばつ」

「うん、芹生が逃げなによつてね?」

鎖骨のあたりにちゅうちゅうつ、とキスの連續。くすぐったくて身悶えてしまつ。

「や、あつ、………… やめつ」

「やめなによ、まだまだ。大枚はたいてやつと手に入れたんだから。ね、ほりもつとよく見せて」

もう言つて例のダサ眼鏡をかけだすものだから、はつ倒しがつになつた。

どこをどうよく見るつもりなのよ、この変態!

近づいてくる顔をぐいぐい押し戻す。

「どうしてわざわざ格好悪い姿で迫るわけつ、最初からナツの姿で口説いてくれたら、アタシ」

「そういうの、長続きしないから。上辺だけの俺にキャーキャー言われたつて困るし」

「でもそれ、いくらなんでもダサ………… つ、あ、ダメ、だつてば………… つ」

「それに、じつちが本当の俺つていうか。この髪型と眼鏡、バンドをはじめる前の素の俺とほぼ同じだし」

「はつ! ? 嘘でしょ」

「本当。でもつてこの姿の俺にチョコをくれたのは芹生が初めて。嬉しかつたなー」

嬉しかつたな、と彼は繰り返す。

その性格は、想像していた『ナツ』よりずっと人間臭いというか、ホンワカしているような気がした。

「舞台の上の『ナツ』じゃなくて、本当の俺を見て。俺の全部を好きになつてよ、芹生」

無茶な、無理矢理テゴメにしてから言つ台詞、じゃないし。  
けれど突然真剣な顔で迫られて、ドキリとしてしまった。

反則だ。もう、眼鏡の向こうの綺麗な瞳から目が逸らせない。

肖衛の中のナツ。ナツの中の肖衛。両方がそこに透けて見えるみたいだ。

よけきれずキスを受け入れると、頭の芯からとろけやつになつた。

「なんて、嫌がる君を無理矢理組み伏せてみたかつたっていうのが本音」

「……最低だ、アンタやつぱり最低だ」

「最低上等。そうだなあ、そのつち最高だつて言わせてみせるよ、

……ベッドの中でね」

しつかり第一ラウンドを開始しながら、いたずらっ子みたいに口角を上げる。心臓がぴょんぴょん、ウサギみたいにはねた。  
強引だけれど官能的な指先に酔わされて、甘じやせやわに溺れそうになつて、抵抗する力は先程よりすこし控えめ。  
ねえ、アンタつてば、かなり恋愛下手でしょ。順番がことじりく  
逆だよ。でもね。

「しょう、肖、衛い」

「うん?」

「あ、肖衛……つ」

「うん、最後まで、その名前で呼んで……」

夫婦になつたこと、ひとまず後悔するのはやめよつかな、とか。  
思ひ、よ?

\* \* \*

「肖衛、しょうごーつ」

風呂上がり、アタシはバスタオル一枚で自宅の中では迷子になると  
いう貴重な経験をさせていただきながら夫の名を呼んだ。返答はない。

「この家はおかしい。中一階だとかピロティだとか、『じちや』『じちや』  
していく初訪問の人間には全然優しくない。

アタシは昨日、いや一昨日越してきたばかりで、未だにトイレの  
数もわかつていらない。

困つたな。着替えの場所くらい覚えておけば良かつた。

「肖衛……どう」

声がかれそう。妙に心細い。

身体も冷えてきたし、シャワーでも浴び直そうかな、なんて迷つ  
ていると廊下の先にモツサリした頭のダサイ男が顔をのぞかせた。

「芹生、どうしたの、そんな格好で」

「どうしたも『じうしたも……』この家広すぎるよ。自分のいる場所が  
わからな」

「もしかして誘つてるの？ もついつかいする？ さつきの芹生、  
すつごく可愛かったー」

「聞いてないでしょ。ていうか肖衛、家の中でまですつとその格好

でこるつもつなの?」「

尋ねながら視線を落とすと、コンビニの袋が田に止まった。それは彼の細い指先から重力に逆らわず垂れ下がっている。

「ちよっとコンビニに行つてきただけ。近隣住民にはいつちで認識されてるからや。ほいお十産」

満面の笑みでそれを差し出し、肖衛は「今度はお腹いわさないようにな」と言ひ、「袋を覗き込んだアタシは豪快に吹き出しちしまつた。これ……いやい」大福。

「ありがと」

「俺も食べる。半分こじりよつ」

「ええ? すゞく分けにくやう」

「いいだろ。夫婦つて感じでさ、いひ、手で千切つて

「絶対偏るよ。アタシ苺は譲らないから」

「言つと思つた」

そんなところが好きなんだよね、と微笑むダサ眼鏡の男に胸がきゅんとしたことはまだ秘密にしておこう。

< f i n . >

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4338n/>

---

いちご盗人（プロトタイプ）

2011年5月9日03時07分発行